

とある幻想小説家の遺書

彼の大きいなる《変容》によって、世界の全ては転換の時を迎えた。

その時から、私はこの部屋に籠り、書物に耽溺するようになった。かつての我々が紡ぎ続けてきた歴史を、営みを、ただひたすらに確認するために。それだけが私の心を癒やし、慰めるものであった。

この世から静謐は失われたのだ。

この世から夢は失われたのだ。

我々が見続けてきた、美しくも恐ろしい幻想の全ては。

あの《変容》が奪い去ってしまった。

我々が発展と進化のなかで忘れて来たものを、我々が空想の彼方に流しやったはずの現実を呼び起こすことによって。我々が人間として、万物の霊長として築き上げてきた現実には、虚しくも破却の時を迎えたのである。

我々は何も知らなかったのだ。ただ、自らが作り上げた虚構の現実という王国の玉座にて王のように振舞っていただけなのだ。なんともお笑い種ではないか。我々は最早、現実から逃避して夢や幻想の世界に没入することはできない。なぜなら、我らの「夢」や「幻想」は現実のものであった——現実に存在しているものは、最早、夢幻でもなんでもない。我々の世界から空想という楽園は永久に消え去ったのである。

だからこそ、私はこの場所で書物に耽溺し続けている。

最早、現実には私に何の幻想も与えてはくれない。空想の羽ばたきを許してはくれない。神は実在し、悪魔やドラゴンが跳梁し、魔術を使う者たちが“私達の現実”を超越する技を見せつけ、異能という力を見出した人間は超人となった。嗚呼——何もかもが、存在してしまった。

かつての書物だけが、私を癒やしてくれる。私に幻想を齎してくれる。私をかつての世界に引き戻してくれる。今の、狂った世界と袂を分かつための防波堤となってくれる。私はこうすることによって、今の時代が非現実で、幻想で、夢であると認識することができる。

この世は既に壊れた。私はかつての世界に生きたものだ。いずれ世界は今の状態を普遍のものとするだろう。現代に生まれた子どもたちは、かつての我々の現実を知らぬままに生きていくのだ。《変容》を受け入れられたものたちも少なくない。否、今やそうしなければ生きていけない。故にこそ、私は死者となるしかない。

私を囲む膨大な書物の中に埋もれて、耽溺を続けて、この世界を夢や非現実と信じて、死していこう。死の果てにこそ、私の現実があるに違いない。

今はそう信じている。この世界は夢に違いない。あの<マアナ=ユウド=スウシャイ>の見る夢の中の泡沫に過ぎないのだ。あるいは、これが現実でしかないというのなら、ヒュ

プノスが私に真なる死の眠りを与えてくれることを祈るしか無い。現実には私達の前に姿を現してしまったような神ではなく——我々が信じた、現実とは異なる世界にあった神々に祈るのだ。

私はこの傲慢を抱き続け、この現実を否定し続ける。どのような謗りを受けようとも、私は《変容》を受け入れられない。私の全ては、これによって破壊されたのだから。

私が紡ぎ続けてきた幻想の世界は、現実というあまりに巨大な力によって虚しくも粉碎された。最早、この世界にありえないものなどないのだろう。私はもう幻想を抱くことはできない。空想という翼は無慈悲にももがれてしまった。そのような世界に私は生きてはいけない。

何もかもが存在してしまう世界に、幻想で満たされた物語の意味はどこにあるのか？

何もかもが不思議ではなくなってしまうのだろう。我々は文明や科学という光で、空想を否定したのではなく——それらのために、空想や幻想を生かし続けてきたのだ。現実から遠く離れた彼岸にそれらを流しやることによってこそ、現実に存在しないからこそ、これらの力は意味を持つ。観測できないからこそ、我々はそれに没入できたのだ。

そして、私がそのような空想や幻想を抱くことは二度と無い。それは、死と同義だ。先の述べたように、そのような世界には生きていくことはできない。私の書き上げたもの全ては、ただただ無知の産物と成り果てた。現実にそれらを存在したことを知らぬ、愚かで無知蒙昧な人間の記した、冗長な過去の物語——未来には、そう認識されていくだろう。

世界は革命された。旧き人間は消え去るのみだ。現実が非現実を圧倒し、空想や幻想であったはずのものが、我らの目の前に現れた。私は否定されたのだ。世界そのものに。

この書物の間に籠城しつづけて、どのくらいが経ったのだろうか。窓は既に塞いでしまって久しい。《大変容》以後、私は永久に、外の世界を見ることを拒否した。私が生きるべきではない世界の有様を見ることなど、意味のないことだ。窓の外では、彼の《大演算機関》によって、ありえなかった差分的な歴史が反復されつづけている。今や、この倫敦は排煙に覆われ、陽の光は届かない。もう一つのヴィクトリア朝が現代に蘇ったなどと——私は、現実の世界で、そのようなものを信じたくはない。

それだけではない。陽の光を失った我が倫敦では、あの血を吸う鬼が跋扈している。旧き吸血鬼の伝承が現代に蘇ったというのか。恐怖や幻想の対象であったものが、現実に存在してしまったなど——私の幻想の産物の数々は、もう何の意味もない。蒸気と、血を吸う鬼どもが我が倫敦を支配している。そのような倫敦を私は見たくはない。

さらに、きっと、世界のいたるところで、空をドラゴンが舞い、魔術で様々な奇跡が起こされ、人に秘められた力によって千里の道さえも見通されているのだろう。そして、今後は、あらゆる場所で、新たな世界のために、新たな秩序のために、多くの存在が、現実に奉仕、努力していくに違いない。私は、それに与することはできない。書物に耽溺し続け、この一室に籠城し続け、救いの眠りにつくとする。寝食を忘れて書物への耽溺を続ければ、必ずやその時は訪れよう。

願わくは、私が愛した幻想に満ちた世界が、死の眠りの果てにあらんことを。

黒煙に覆われた我が倫敦の「幻想のための書架」にて

【解説】

これは、英国ロンドンにて発見された、とある幻想作家の遺書である。内容から判断するに、ロンドンで発生した《大変容》に伴う「^{Difference Engine}時代の再反復」と呼ばれる災異の最中に記されたと考えられる。詳細な記録は《大変容》初期の混乱のために残されていないため詳細は今なお不明であり、検証中であるが、この「^{Difference Engine}時代の再反復」によって、「チャールズ・バベッジの「階差機関」「解析機関」の発明により、蒸気機関が異様な発達を遂げたヴィクトリア朝のロンドン」という、現実には存在しなかった歴史がロンドンの一部地域に再現され、ロンドンは黒煙に覆われ、陽の光が届かなくなったと僅かな記録には記されている。理由は不明であるが、この「^{Difference Engine}時代の再反復」は《大変容》の後の数年後に解消され、現在のロンドンは一部「^{Difference Engine}時代の再反復」の影響を残すものの、復興を遂げている。

同時期に、「^{Anno Dracula}闇の紀元」と呼ばれる「物語型」の災異が発生している。詳細な記録が残されていないため、不明な点が多いものの、「^{Difference Engine}時代の再反復」によって陽の光が遮られたために、怪異が発生し、ロンドンをそれらが支配したとされる災異である。この時に出現した怪異については今なお詳細がわかっていないが、いわゆる「吸血鬼」であったらしいことは確実である。それが現実に存在した「吸血鬼」であったのか、人々の思念が生み出したものなのか、それともその他の存在であったのか、証明することは難しい。現在、ロンドンは当然ながらこれら怪異に支配されてはおらず、復興を遂げている。ロンドンを覆う蒸気が晴れ、陽の光が取り戻された際に姿を消したとの記録も残されている。

この遺書は、「^{Difference Engine}時代の再反復」「^{Anno Dracula}闇の紀元」についての重要な資料であると共に、《大変容》後の、世界の現実の変化に耐え切れなかった者の直接の声であり、《大変容》直後の人々の意識を知るための重要な資料であるといえる。故に《資料編》への収録が決定された。